



TITLE:

京都外科集談会第372回例会

AUTHOR(S):

CITATION:

京都外科集談会第372回例会. 日本外科宝函 1961, 30(4): 653-654

ISSUE DATE:

1961-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/207235>

RIGHT:

京都外科集談会第372回例会

昭和36年1月26日

(1) Weber-Ramstedt 氏手術例とその応用 例

外Ⅱ ○山本 輝雄・小柳 津達

最近我々が経験した生後60日の女兒に於ける先天性肥厚性幽門狭窄症及び61才男子に於ける癌転移性腫瘍による圧迫性食道狭窄症の2例について、Weber-Ramstedt 氏手術及びその応用を試みて好結果を得たので報告した。

(2) 胃癌胃潰瘍の4家系について

大和高田市民病院外科

杉本雄三・○原 慶文・鯉江久昭

開院来7年間に行つた、約400例の胃十二指腸手術中に、癌、潰瘍を家族的に有する4家系が含まれている。この中9例が手術で確認され、他4例がレ線透視あるいは他の方法で確認された。

I家：長男吐血死、四、五男共に胃十二指腸潰瘍(手術)。A家：母胃癌(手術)。父胃癌死。長男、三男共胃潰瘍(手術)。次男胃潰瘍(レ線確認)。三女胃炎。Y家：母胃癌(手術)。長男四男共胃潰瘍(手術)。二、三男胃炎。S家：父吐血死。長男胃潰瘍(レ線確認)。次男胃癌(レ線確認)。長女胃癌(手術)。

以上より、①女子に潰瘍がなく、いづれも癌であることが興味深い。②潰瘍の位置、大きさでI家にも類似性を見た。③われわれのデーターは、一貫して手術などによつて確められた、比較的確實なものであるが、これ丈で、その遺伝性を云々することは早計である。今後の諸兄の参考になればと報告する。

追加 杉本雄三

このデーターから、いえることは、胃癌も胃潰瘍も同一家系に現われるということです。唯一元的にあるものから癌と潰瘍が同時に別個の形で発現するのか、潰瘍が先行して癌に変性して行くのかの相違です。

女に潰瘍がなく、いきなり癌の形で出るとは興味深いことです。大体潰瘍は男子に多いのですが、私の所の手術例では圧倒的に女子が少いようです。女子にはサイレントの期間があつて、いきなり癌という形で現れるように思います。

質問 大阪市大 原田直彦

その4家はどういう集団の中の4家系ですか。

答 杉本雄三

私の外科を訪れた400例の手術例の中のものであつて、特定の者ではありません。奈良県中部南部の人達で村落的に多少の偏りはあつても、山間部とか、平地の区別はありません。

質問 外Ⅱ 村山保雄

環境による影響はありませんか。

答 杉本雄三

A家の人達はそれぞれ離れて暮してます。そうした地理的なものを断定しうるデーターの持合せはありません。皆様がこうしたデーターを持寄つて発表して頂ければ、やがてこうしたことは、判然した形をもつて明らかになると思います。

(3) フィラリアに原因すると考えられる下 空静脈狭窄による象皮病の1治験例

外Ⅱ ○林 一彦

内Ⅲ 小西分承

32才の女子、約1年前より下肢倦怠と共に全身に有痛性発赤を来とし、その後、両下肢、腰部、下腹部に浮腫を生ずる様になつて来た。本院内科にて当初Thrombophlebitisを疑はれ、Anticoagulant等の投与を受けたが、その後末梢血中よりMikrofilariaを検出、病因を明かにし得た。Piperazin 剤の長期投与を受けたが軽快せず、手術的療法を求めて外科に転科した。浮腫は結締織性増殖は余り認められず、リンパ節腫脹も認められなかつた。下大静脈の撮影を行つた所、左右腸骨静脈分岐部上方に狭窄を認め、又卵巣静脈、腰静脈等に副側血行路が発達していた。手術により、腎静脈下部に到る約4cmの狭窄部を剝離、術後、下肢の浮腫は急激に軽減した、手術的摘出の旁大動脈リンパ節にFilaria 性組織像あり、静脈閉塞は管壁のフィラリア性病変にあるものと考えた。

(4) 内頸動脈閉塞及び狭窄の症例について

外Ⅰ ○吉田耕造・丸山 泉

菊地晴彦・和賀志郎

我々は脳血管障害の神経学的診断の元にCAGを行

い、内頸動脈に閉塞或は狭窄を証明した7例を経験したので報告した。

その症状より3つのGroupに分類し、それぞれCAGとPEGの特徴を述べ、更に診断及び治療について文献的考察を加えた。

質問 大阪市大外科 原田直彦

a. carotis int. の bypass というような procedure はありませんか？

例えば、a. brachialis を上肢のギセイにおいて使用するという idea は如何でしょうか？

答 外 I 吉田耕造

発症後の時間の短い場合は、Thromboectomy にて十分だと考えますが発症後相当時間が経っている時には、既に Hirnerweichung が起つているので余り好成績は得られないと考えます。

(5) 左下腿ガス壊疽の1例

那賀病院 外科

浜野研歳・山崎徳雄・〇土橋 修

左下腿開放性骨折及び跟骨剝離骨折を併う左足部挫創にガス壊疽を併発した23才男子の一例に遭遇し、左大腿部切断にて一命を救い得た。

本症例は、受傷後抗生物質を大量使用したに拘らず発病し、抗血清も十分なる効果を見ず、受傷後3日目には大腿下部に迄壊死が拡がり、著明な中毒症状を呈したが、大腿健康部に於ける下肢切断により劇的な症状の改善を見た。抗生物質の進歩した現在に於ても、重症ガス壊疽に対しては、可能なる限り早期に病巣の完全な切除が行はるべきであると考えます。

質問 九間外喜雄

1) ガスは悪臭を放つたかどうか、混合感染がなければ殆ど無臭であるとされているが。

答 土橋 修

受傷後、2日目頃より高度の悪臭を認めました。この場合、混合感染は十分考えられます。

(6) 興味ある悪性黒色腫の1例

那賀病院 外科

〇土橋 修・山崎徳雄・浜野研歳

症例 55才、男、全身に散在する皮下腫瘍、腹部腫瘍及び下痢を主訴とし、開腹手術により空腸上部の手

拳大の腫瘍を剔除したが、術後30日目に回腸腫瘍転移のため腸重積を起して死亡した。

剖検により悪性黒色腫及びその転移と診断され、転移は全身皮下(数十ヵ所)、脳、心、腎、脾、胸、腹腔リンパ腫に認められるが、原発巣と考へられる腫瘍は手術にて剔除した空腸腫瘍以外に見当らず、空腸原発の悪性腫瘍が全身転移を来したものと考へられる。組織像は極めて多彩である。空腸原発の悪性黒色腫はCox-Hoyt らによる報告がある。

(7) 後縦靱帯化骨による脊髄麻痺症例

整形 笹井義男

56才の男。会社員で約6年前から誘因と思われるもなく下半身の麻痺を来し、2年後には臍以下の全麻痺を来した症例を手術した結果第7頸椎より第3胸椎迄の間の椎管腔周囲の異常骨増殖特には第2胸椎々体後面の後縦靱帯の異常骨化により脊髄が圧迫され、変性に陥つているのを認め、この膨隆部を切除した。

レ線像では一部は強直性脊椎関節炎や、変形性脊椎症の像を認めたが、その異常骨化の成因については不明である。

(8) 厚生年金玉造整形外科病院に於ける整形外科機能訓練に就いて(膝内障の機能回復)

大塚哲也

整形外科機能訓練を行つた半月板損傷: 21例、側副靱帯損傷: 6例、前十字靱帯断裂: 1例、計28例に就いて一般統計、機能回復状況、及び予後調査に就いて報告した。

(9) 機能訓練実用器械の改良型

厚生年金玉造整形外科病院

大塚哲也・牧野文雄・錦織 正

I) 下肢屈伸力測定器。横臥位及び椅子坐居に於て測定するもの。

II) 肢関節脱臼用三輪車。

III) 鞍型訓練器。矢張り股脱用。

IV) V字型指訓練器。

以上に就いてスライド展示により発表した。